

妹の性癖を俺だけが
知っている。

雨宮照

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

妹の性癖を兄だけが知っている物語です！

まだ内容も投稿予定も未定です！

人気がありそうなら不定期で続き書きます！

目次

プログラグ

1

プロローグ

こんなことを突然言い出せば、大抵の人に頭がおかしいと言われるのだろう。しかし、今だけは言わせてくれ。

——俺は、妹の性癖を知っている。

いや待って、いなくならないで！

おかしいことを言っているのはよく分かってるんだ！

……そりゃあ、兄貴が妹の性癖を知ってるなんて、恐怖以外の何物でもないもんな。俺だつてそんなことは重々承知しているさ。

——でも俺は、妹の性癖を知っている。

ああ、だから待ってつてば！

もう、我慢が出来ないのかな最近の若者は……。

え？ 俺……？

十六歳だけど……つて、待て待て、本を破くのは違うつて！

若者が偉そうに説教したのはすまなかつた。

素直に謝ろう。

でも、もう少し聞いていってほしい。

俺の——妹の性癖と向き合った、一ヶ月の話を。

*

妹、十五歳。

名前は、月宮小夜。

俺の一歳下の彼女は、可愛らしい見た目と朗らかな性格からみんなに好かれる人気者だ。

入学したときには、二年生の俺の耳にまでかわいい子がいるって噂が届いたくらい。

それに文武両道とあって、先生たちからも一目置かれる存在なのだ。

そんな彼女が、今日もまだ明るくならないうちから俺の部屋にやってきた。

「お兄ちゃん……あの、今日もちよつと付き合っていただけませんか……う！」
遠回しな言い方で、外出に誘う小夜。

だが正直に言うとは、俺は夜の寝つきがあまりいい方ではない。

本当はこんな時間に外出などしたくない。

部屋の時計を見ると、指し示すのは午前三時。

草木も眠っているのに、どうして俺は起き出さなくちゃいけないのか。

寝起きのぼーっとした頭にふと疑問が浮かぶ。

しかし、次の瞬間首を振るとすぐにその答えは導き出された！

もちろん、そんなのは決まっているだろう。

妹の、性癖のためだ！

「行くぞ小夜！ 約束の地へ急ぐのだ！」

「は、はいお兄ちゃんっ！ ありがとうございますっ！」

こうして俺たちは、連続三日目の夜の散歩へと繰り出していくのだった。

*

身支度をして、玄関をくぐる。

うーん、秋とはいえ随分寒いなあ。

昼間はまだ暑くてギリ半袖で過ごせるくらいなんだけど、夜になるとそうはいかない

みたいで、ドアを開けると既に吹いてきた風が頬に冷たい。

隣の小夜も靴ひもを結び直しながら少し寒そうにしている。

丁寧に靴ひもを結ぶ彼女を見ると、上を向いた彼女と目が合った。

「ちよつと寒いですね」

「そうだな……上着持つてくか？」

うーん、と迷っている様子の小夜。

肌寒いなら素直に持っていけばいいのに。

そう思つて俺は家に戻ろうとするが、小夜がそれを制止した。

「寒いなら、手をつなげばあつたかいですよ。ほら、お兄ちゃん」

言つて、笑顔で手を差し出してくる。

俺はその手を取ると、少しかがんで彼女の耳元に唇を近づけ、言つた。

「小夜の手だから、あつたかいな」

すると小夜は顔を真つ赤にして、俯いてしまった。

普段俺以外にはあまり見せないけど、この時の小夜は一番かわいい。

その表情も堪能すると、俺たちは目的地へと向かつて歩き出した。

*

目的地に着くまで、俺たちは誰に見つかれることもなかった。

さすが草木も眠る深夜つてとこか。

車は何度か通つたけれど、歩行者や自転車は全く見ていない。

「今日も、できそうですね」

小夜が、小さく笑つて嬉しそうに微笑む。

彼女の性癖は他人に見られるとまずいから、喜んでいるのだろう。

かくいう俺も昨日は小夜の性癖が見られなくて肩を落としたんだ。

今日こそ喜んでる小夜が見られると思つたら、自然と笑みがこぼれていた。辺りをもう一度見まわす。

よし……誰もいないな。

確認すると、俺は小夜へと合図を送る。

小夜もそれを見ると所定の位置にダツシユし、準備を始めた。

まず、靴下を脱いでベンチに置く。

次に、Tシャツ、そしてズボン。

どんどんと、身に着けているものが外されていく。

そして、パンツ、ブラジャー。

着ているものを、全部脱ぐ。

この時点で小夜は興奮でダルマみたいにまっかつかだ。

頬を紅潮させて、息を荒くしている。

「じゃあお兄ちゃん……いきますよっ！」

それから、全裸の小夜はダツシユする。

今いる目的地——公園の、砂場へと。

そして、砂の海に向かってそのままダイブ！

「うっひよ————っ！ うおんうおん！ ひゃあああああつ！」

ごろごろごろごろごろごろごろごろ。

ごろごろごろごろごろごろごろごろ。

思う存分、ごろごろごろごろ。

気の向くままに、ごろごろごろごろ。

その控えめな胸も、小さくまとまった尻も、すべてをさらけ出して。

そして、すべてを硬い砂にこすりつけて。

「どりやつふう——　　気もつちいい——　　！」

快感を得るために、ケモノへと還って行く。

人間としての尊厳を、振り払っていく。

「うなあ——　　うっほ、うほ、うっほ——　　！」

俺はそんな妹の姿に——涙を、流す。

優等生の皮を被り、他人の顔色を窺い。

意識はせずともそうして生きてきた彼女は、息苦しかったのだろう。

窮屈だったのだろう。

そんな彼女が、今思いのままに転がっている。

砂の上で、ケモノのように転がっている。

その美しさに——胸が、張り裂けてしまいそうだった。